

●ブックトークシナリオ

【テーマ】 文豪に挑戦！

【対象】 高校生

【所要時間】 約25分

【紹介する本】

	書名	著者名	出版社	出版年
1	走れメロス 富嶽百景	太宰治／著	岩波書店	2002
2	こころ	夏目漱石／著	旺文社	1997
3	赤毛のアン	ルーシー＝モード＝モンゴメリ／作 岸田衿子／訳 安野光雅／絵	朝日出版社	2018
4	世界名作ショート ストーリー 5 ポー	ポー／作 千葉茂樹／訳 佐竹美保／画	理論社	2016
5	銀河鉄道の夜	宮沢賢治／原作 藤城清治／影絵と文	講談社	1982

【シナリオ】

●導入

芥川龍之介、夏目漱石、森鷗外、トルストイ、ヘミングウェイ。皆さんは今名前を挙げた作家を聞いたこと、もしくは本を読んだことがありますか？全員、「文豪」と言われる有名な作家です。「アニメや映画で知っているけれど読んだことがない」という人も多いのではないのでしょうか。そこで、今日は「文豪に挑戦！」というテーマで本を紹介します。

1 『走れメロス 富嶽百景』

表紙を見せる

最初の本は甲府に住んでいたこともある作家、太宰治の短編集『走れメロス 富嶽百景』です。タイトルにもなっている「走れメロス」の最初の部分を読みます。

p.118 1～3行目を読む 【メロスは激怒した。必ず、かの邪知暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮らして来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。】

メロスは正義感にあふれ、熱い心を持った人物です。妹の結婚式のために買い出しに行った市で、家族や家来をいとも簡単に殺してしまう暴君の話聞き、王城に乗り込んでいきますが…捕まってしまう。

メロスは妹の結婚式に出たいと考え、王にこんな風に願い出ました。

p.121 14～p.122 12行目を読む 【ただ、私に情けをかけたつもりなら（中略）どうせ帰って来ないにきまってる。】

さあ、メロスは約束の日までに帰ってくるのでしょうか？続きが気になる人は読んでみてください。セリヌンティウスとの友情が描かれた中に、ユーモアも含まれた楽しい作品です。

同じくタイトルになった「富嶽百景」は、

p.37 3行目を読む 【富士には月見草がよく似合う】

の一文が有名です。太宰が甲府に住んでいる時に書かれた作品で、富士山や御坂峠が登場し身近に感じられるので、こちらもおすすめです。

2 『こころ』

「走れメロス」も「富嶽百景」もとても有名な作品で、教科書で読んだことがあるという人も多いのではないのでしょうか。もう一冊、教科書に載っている作品を紹介します。

表紙を見せる

夏目漱石の『こころ』です。「こころ」は

p.3 目次を読む 【上 先生と私・中 両親と私・下 先生と遺書】

の三章に分かれています。教科書は下がメインです。上の冒頭を読みます。

p.7 1～3行目を読む 【私はその人を常に先生と呼んでいた。だから此所でもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」と云いたくなる。】

上で、学生である「私」は夏休みに訪れた鎌倉で先生と出会います。その後、先生と親しくなりますが、先生には奥さんも知らない秘密の過去があるようです。中では、学校を卒業し実家へ帰った「私」に、先生から手紙が届きます。そこにはこう書いてありました。

p.165 2～3行目を読む 【「この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。】

下は全て先生の遺書の内容です。ここで先生の過去が明らかになります。先生は友人Kとある女性をめぐる三角関係になっていたのです。先生はなぜ自殺したのでしょうか？読み応えのある本ですが、チャレンジしてみてください。

3 『赤毛のアン』

太宰治も夏目漱石も日本の文豪です。そこで、次は海外の文豪の作品を紹介します。

表紙を見せる

カナダの作家、ルーシイ＝モード＝モンゴメリの『赤毛のアン』です。作品の舞台は、モンゴメリが生まれ育った自然の豊かな美しい島、プリンス・エドワード島です。

物語の最初に登場するのはグリーン・ゲイブルズに住んでいるマシュウとマリラの兄妹です。二人は、だんだん年をとってきたので畑仕事を手伝ってくれる男の子を孤児院から引き取って養子にもらおうとします。しかし、マシュウが駅に迎えに行くと、そこには女の子しかいません。どんな女の子か書いてあるので読みますね。

p.26 9～16行目を読む 【年のころは十一才ぐらい。(中略)そして、マシュウ＝カスバートがこっけいなほどおそれている少女のからだには、なみはずれたたましいがやどっていると、かんがえたであろう。】

女の子はマシュウに気がつく、挨拶し、弾丸のようにしゃべり出しました。

p.27 4～11行目を読む 【「グリーン・ゲイブルズのマシュウ＝カスバートさんですね？(中略)きっとむかえにきてくださるって、信じてたわ。】

この女の子が主人公アンです。マシュウは、アンを置いて帰るわけにもいかず、ひとまず家に連れて帰ります。

p.54 1行目～7行目を読む 【マシュウがドアをあけると(中略)男の子はいなかったですと！】

さあ、アンは孤児院に送り返されてしまうのでしょうか？

4 『世界名作ショートストーリー ポー』

表紙を見せる

次はアメリカの作家、エドガー・アラン・ポーの短編集『世界名作ショートストーリー ポー』からミステリー小説「黄金虫^{おうごんちゅう}」を紹介します。

この本には主人公わたしと、友人レグランド、レグランドの付き人ジュピターの三人が登場します。家が没落し、島で暮らしながら、狩猟や釣り、貝殻や昆虫の標本集めを楽しんでいたレグランドがある日、新種のコガネムシを捕まえました。レグランドは虫の特徴を、こう説明しています。

p.118 7～9行目を読む 【ピカピカと金色に輝いていて、大きめのクルミぐらいはあるな。背中の上のほうにまっ黒な模様がふたつついてるんだ。そして、下のほうには細長い点がある。それで、触角は……】

するとジュピターは触角などなくて、羽以外が全部、金でできている虫だと言います。レグランドが描いてくれた絵を見ると、その虫はまるで觸癩のように見えました。

一か月後、レグランドはこんな事を言い始めます。

p.132 9～13行目を読む【「この虫は、ぼくを大金持ちにしてくれる黄金虫だってことだ（中略）あとはぼくが正しく使って、あの虫が指し示す黄金にたどりつくってことだ」

つまり、あの新種のコガネムシは黄金のありかを示す金の虫だと言うのです。わたしもジュピターも興奮して様子のおかしいレグランドを心配しますが、結局一緒に黄金を探しに行くことになりました。レグランドはなぜ黄金が隠されている場所がわかったのでしょうか。そして三人は黄金を見つけることができるのでしょうか。答えは本を読んで確かめてみてください。

ポーはミステリー以外にも幅広いジャンルの作品を残しています。探偵小説が好きな人は「モルグ街の殺人」を、怖い本が好きな人はこの本に入っている「黒猫」をどうぞ。

5『銀河鉄道の夜』

最後は絵本で宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』をお楽しみください。

主人公は少年ジョバンニです。

p.2・3を見せ、p3 5行目～p4 5行目を読む【その日は、一年に一度の星祭り（中略）町の活版所へはたらきにいらしているのです】

p.10・11を見せる

友だちのカンパネルラから年に一度の星祭りに誘われたジョバンニは、仕事帰りに会場へ向かいますが、途中で会った同級生にからかわれ逃げ出してしまう。ジョバンニはこんな気持ちになりました。読んでみます。

p.13 6～9行目を読む【ぼくは、どうしてこんなさびしい気持ちになるんだろう。ああもうぼくは、どこか遠いところへ行ってしまいたい……。でも、もしカンパネルラがいっしょだったらどんなにいいだろう……。】

その時、眼の前がぱっと明るくなり、空一面が光の粒できらきら輝き始めました。気がつくともジョバンニは列車に乗っていて、前に座っていたのはこの人でした。

p.16 5～p17 1行目を読む【すぐ前の席に、（中略）それはカンパネルラだったのです。】

二人を乗せた汽車は銀河鉄道を走っていきます。二人は鳥を捕まえているおじさんに出会います。どうやって捕まえるか読んでみます。

p.26・27を見せ、p26 4行目～p27 7行目を読む【「どんな鳥をつかまえるの。（中略）雪のとけるように消えていきました。」

それから、二人はふたごの星やインディアンへの踊り、さそりの火を見ながら、「ほんとうの幸せ」について考えます。さそりの火を見る場面です。

p.33を見せ、1行目～6行目を読む【川のむこうが、きゅうに赤くなりました。（中略）「どうして空でもえているんだろう。」

表紙を見せる

ジョバンニとカンパネルラと一緒に、美しい銀河鉄道で旅をしているように感じられるこのファンタジー小説。現実世界に戻ると、衝撃的なラストを迎えます。気になる人は読んでください。

●まとめ

今日は「文豪に挑戦！」というテーマで本を紹介しました。最初に熱い友情を描いた太宰治の『走れメロス 富嶽百景』次は先生の過去が気になる夏目漱石の『こころ』孤児のアンへの運命や成長を描く『赤毛のアン』宝のありかがわかる虫が登場するポーの『黄金虫』最後に少年達が宇宙を旅する宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』です。気になった作品を読んでみませんか？ぜひ、多くの人に読まれてきた名作を楽しんでみてください。

【その他の本】 こちらの本もおすすめです。また、ご自身で追加・差し替えをするなど工夫してみましょう。

- ・『李陵・山月記』 中島敦／著 旺文社 1997年
- ・『車輪の下』 ヘルマン・ハッセ／作 実吉捷郎／訳 岩波書店 2009年
- ・『たけくらべ』 樋口一葉／著 旺文社 1997年

- 『檸檬』 梶井基次郎／著 新潮社 2003年
- 『蜘蛛の糸』 芥川龍之介／作 遠山繁年／絵 偕成社 1994年

山梨県立図書館 2019.12